

「北朝鮮の国民生活を直視せよ」

2017年10月23日

北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）は国際社会の批判を無視し、ミサイル発射と核実験を立て続けに行っている。長足の進歩に驚かされる。緊張が高まっているが、平和的な解決を望みたい。北朝鮮の言い分は、板門店で結ばれた休戦協定を破棄し、平和協定を結び、国の存続が承認されることである。イラクとリビアは米国を中心とした有志連合軍に攻撃され、指導者であったフセイン、カダフィは葬り去られた。大量破壊兵器保持と見なされ、イラクは攻撃されたが、実際にはなく、残忍なイスラム国（IS）を生み出す結果になった。両国は混沌とし、收拾のつかない状態にある。この二国は核を持たなかった。北朝鮮の金正恩委員長は核爆弾を搭載したミサイルを持てば、攻撃されず、対等に交渉ができると考えた。核こそが国を守り、生き残る唯一の方法とし、海軍や空軍には力を入れず、核とミサイルに特化した軍事態勢を作り上げていった。金委員長は国民に選ばれた指導者ではなく、金王朝の血筋を引く、傲慢でわがままな独裁者である。彼は国民のことは目に入らず、金王朝の存続を求めているとしか見えない。

この北朝鮮に対し、米国をはじめ、国際社会は経済制裁を強め、日米韓は軍事的圧力を高めている。北朝鮮周辺では、米韓の空母と爆撃機が一体となった軍事演習を絶え間なく行っている。金委員長は言いたい放題に、刺激的な発言を繰り返しているが、耐え難い恐怖に晒されているのが現実であろう。彼は自国から攻撃を仕掛けたら、圧倒的な軍事力で国は壊滅的に破壊されることを知っている。北朝鮮の国家予算は日本の1万分の1、茨城県の予算とほぼ同額である。戦争などできない。逆に、米国が攻撃を始めたら、韓国、日本に甚大な被害が生じる。「米国に死者は出ない」という米国人もいるが、国際世論は許さないだろう。軍事的な選択による解決方法はない。突発的な事故による戦争勃発が、最も恐れられる事態である。

米国のトランプ大統領は、今にも戦争を始めるような強硬な発言を繰り返している。安倍晋三首相は米国追従一辺倒で、「圧力」としか言わない。無意味なアラートを鳴らし、避難訓練をさせ、列車まで止めている。「国難突破解散」と言い、徒な緊張を煽っている。対外的な緊張を煽って、「モリ・カケ問題」から目をそらそうとするのは、権力者の常套手段である。憲法9条1項には「武力による威嚇又は武力行使は、国際紛争を解決する手段として、永久にこれを放棄する」と謳っている。安倍首相は明らかに憲法に違反している。また、韓国、北朝鮮の南北分断は、植民地支配をした日本に遠因がある。

北朝鮮の映像を観る度に、日本の戦時中の光景と重なる。天皇のために死ぬことを至上の価値とし、「欲しがりません、勝つまでは」と窮乏に耐えた。国体（天皇制）護持のためなら、国民はどんなに苦しいとしてもよいとした。北朝鮮の国民は金王朝に忠誠をつくし、全てを献げることが強要され、金委員長の意に添わなければ、粛清される恐怖政治下にある。現在、中国の経済制裁の影響が大きく、死者を生み出す状態にまでに緊迫しているという報道を聞いて、本当に心が痛む。北朝鮮の国民生活は、日本の戦時中そのもので、彼らの苦難を理解できるのは日本ではないか。

「圧力」という威嚇や、武力による解決を放棄した日本である。人権、生存権は普遍的な価値を有している。死者を出すまで疲弊した北朝鮮国民の窮状を直視し、対話の道を提示することが、日本が負うべき務めである。政治の目的は力の強さを競り合うことではなく、明日の平和を模索する真摯な、気高い使命を果たすことではないか。